

展 望

国際学会を通して思うこと

京都大学大学院地球環境学堂 勝見 武

2014年9月から二期にわたって国際学会の理事を担当させて頂きました。その間、日本支部の皆様にはご支援・ご協力を賜りました。誠にありがとうございました。

8年担当させて頂いて様々感じたことは、「国による国境の垣根の高さの違い」に集約されるのかもしれない。欧州は当然のことながら国を超えてのつながりが強く、多くの理事達が自分の出身国とは異なる国で学んだ経験を持ち、また現在も別の国で活躍しています。メンバーの活動域は欧州大陸だけでなく米州大陸とも強くつながっています。彼らが国を超えて活動しているのをみると、我々日本人が国内で地方を超えて働いているのと同レベルではないかとさえ感じます。新型コロナウイルス感染症の拡大によって国際学会のフィジカルな活動は全面停止され、全てがオンラインとなってからは、その特徴がより顕著になったと感じます。欧米で行動制限の緩和が進んで国際的な往来も比較的早くに復活してきたのに対して、日本や中国が様々な制限を解くのにには時間がかかりました。その中で、我々は国際的な情報からも、途絶とまでは言わなくとも少し縁遠くなっているような気がいたします。特にジオシンセティックス分野で言えば、プラスチック廃棄物あるいはマイクロプラスチックの問題があげられます。国際ジオシンセティックス学会では、海洋におけるマイクロプラスチックの問題がクローズアップされると即座に反応して特別委員会を立ちあげ、声明も出しました。日本では、個々の企業や会員の方々には問題意識をもっておられると思いますが、業界あるいは学界全体ではこの問題をもう少し緩やかに（鈍感に？）捉えられているようにも感じました。日本ではジオシンセティックスが現場に十分に普及していて、社会的に理解されているということの表れなのかもしれませんので、そうであれば先達の方々をはじめとする関係者のご尽力の賜物とも思います。そうは言いながら最近国内で感じるのは、ジオテキスタイルやジオグリッドについてきちんとご存じない方が土木関係にも未だに多いこと、ましてや「ジオシンセティックス」となるとほとんど未知の用語となっていることです。資料にジオグリッドの写真を示して「ジオテキスタイル」と注釈をつけている例も一つ二つではありません。以前は、広義のジオテキスタイルとしてジオグリッドも含んでいたようですから、これは完全に間違いとは言えませんが、それでも土工に関わろうとする方々でさえジオテキスタイル・ジオグリッド・ジオシンセティックスの定義を認識されていないのは、少し寂しく感じます。国際学会では、ジオシンセティックスの普及に向けて様々な取組みを行っています。会員や一般技術者が勉強するためのリソースだけでなく、非会員の大学教員や建設行政や環境行政の担当者、あるいは一般社会に向けたコンテンツも準備が進められています。基本的なこと、前提となる事項からしっかりと説明しようとするスタンスは、西洋の国々に多いローコンテクストの文化に基づくものかもしれません。だからと言って、このような取組みは文脈・行間を読むのに長けたハイコンテクスト文化の日本では定着しにくいと決めつけるのは間違っていると思います。会員の方々には、これらの国際学会の取組みをうまく取り入れて、技術開発や現場支援に活用頂ければと思います。